

七面大明神

敬慎院は、七面大明神として知られる龍神を祀っています。敬慎院には、七面大明神に関連した小さな資料館があり、見学することができます。

日蓮と七面大明神

1277 年、身延山の御草庵近くの大きな岩の上に座って、日蓮が弟子や信者に講話をしていたという伝説があります。その途中、一人の美しい女性に加わり、日蓮の説法に耳を傾けていました。集まった人たちは、すぐにその女性に不審を抱き始めました。日蓮は何かを隠しているのではないかと思い、その女性に近づき、本当の姿を見せてほしいとお願いしました。女性は微笑み、水を求めました。

日蓮は持ってきた水差しを使って、女性の手の水を一滴垂らしました。瞬間に龍の姿になりました。"私は七面山の女神です。七面山に住んでいます。法華經の守護神として、これからも山を守り、身延山の鬼門を守ることで、人々に安心を与えていきます。"そして龍は七面山に向かって飛び立ちました。

日蓮聖人と龍神像の彫刻

敬慎院ミュージアムには、江戸時代に作られた日蓮聖人と龍神の彫刻があります。この彫刻には、日蓮が女神の上にいるという珍しい姿が描かれています。

龍神は日蓮たちの前に現れたとき、山と法華經を唱える者を守ることを誓いました。その意味では、日蓮に仕えていたということで、日蓮の下に描かれています。

また、日蓮自身が神格化されているという解釈もあります。江戸時代になると日蓮宗が発展し、多くの信者が日蓮の教えを崇拝するようになりました。ある者は、彼の業績が神々の間での地位を獲得したと信じていました。

龍神の爪

敬慎院博物館の所蔵品の中には、長さ約 10 センチ、幅約 6 センチ、大きな歯や爪の形をした珍しい化石があります。敬慎院裏の一の池から出土したもので、龍神の爪と考えられています。

日朗聖人の手書きの巻物

この「南無妙法蓮華經」は、日蓮の初代弟子であり後継者でもある日朗聖人の書によるものです。七面敬慎院の開山を記念したものです。

巻物は 700 年前にさかのぼります。日蓮聖人の死後、日朗聖人は弟子たちとともに七面山に登りました。山頂付近にある大きな岩と神秘的な池を見て、龍神の存在を確信した日蓮聖人たちは、七面山に祠を建てました。そして、後に奥之院となる場所に七面大明神を祀った祠を建てました。これが日蓮宗の山行の始まりと言われています。その後、総本山は現在の敬慎院の地に移されました。このような歴史から、七面山の敬慎院の開祖は日朗聖人と言われています。